民俗學研究所第二三回公開講演会

日時
平成三年七月二日（金） 午後五時３０分

会場
近畿大学EキャンパスA館三〇六教室

講師
東京学芸大学教授 岩田重則

演題
墓制研究の課題

岩田重則

「無墓制」があるが、これまでの民俗学の墓制研究の問題点を指摘するところからはじめたい。そもそも墓制研究では、分析・分類のための基準が設定されたことがなかった。たとえば、墓制研究で使われてきた用語としては、特定の基準を設定した上で作られた用語ではなく、「両墓制」は「九三六年の大間知篤三両墓制の資料」（山村生活調査第二回報告書）からの名称である。バックグラウンドは九四六年の柳田国男「先祖の話」（筑摩書房）、「無墓制」は九六四年の村瀬正章「墓のない家がある」（地方史研究）第七号が、それぞれ経過を見ても、これから三用語には分類・分析の基準が存在していないことがわかる。

しかし、このままでは面が広すぎる。ここでは試案として、三つの分析・分類基準を設定してみる。一つは処理方法（埋葬・非埋葬）、二つは形態（遺体か遺骨か）、三つは三塔（建立か非建立か）である。たとえば、
「両墓制」と呼ばれてきた墓制は、遺体を埋葬した石塔を建立する墓制であるから、遺体埋葬石塔建立型墓制とは同じく遺体埋葬石塔建立型墓制となり、異なる用語で示す必要のない墓制である。このように、分析・分類のための基準を設定し、墓制の全体像を把握するべく必要があるものと思われる。

民俗学の墓制研究は、伊波善雄『南島古代の葬儀』第四四巻第六号、一九九〇年を承けた柳田國男の墓制史を概観し、大森知道三『両墓制の資料』九三六五年が両墓制を試みに、両墓制を中心研究を展開することにはじまる。「埋葬」と「葬葬」をいう用語のもとに、それをさらに普及させたのが柳田國男『護墓』九五六年、古い書院、墓制研究における先祖祭祀研究の傍証として利用され、墓制研究といえば両墓制と霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、といった故実ではないほどであった。われわれの霊魂観研究は、墓制研究としてではなく、両墓制研究による霊魂観研究、いった
うに思われる。試論にすぎないと、このように分析・分類のための基準を設定することにより、墓制の民俗事象を把握し、墓制研究をなうことが重要ではないかと思われるのである。